
望む者、望まれる者

roon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

望む者、望まれる者

【Nコード】

N9708R

【作者名】

roon

【あらすじ】

人間界の医療都市ヴェニスで院長をしているクルフェの元に、一つの縁談が舞い込んだ。しかし、彼には他に想い人がいて――

以前書いていた自小説の番外編です。手書き作品につき、現在本編を投稿できないので、番外編でも良いという方のみどうぞ。一応本編なしでも読めます。

1 (前書き)

あらすじにも載せましたが、これは以前書いていた自小説の番外編です。現在本編を投稿できないので、番外編でも良いという方のみどうぞ。

1

「・・・・・・・・」

クルフェは自らの研究室に置かれていた手紙を読み、小さなため息を漏らした。複雑そうに眉間に皺を寄せ、手に持っていた手紙を机の上に投げ出す。普段冷静なクルフェがここまで感情を露わにすることは滅多なことではない。

「・・・・・・・・どうするか・・・・・・・・」

再びため息を漏らしたクルフェの耳にコンコンと扉を叩く音が室内に響いた。時刻は丁度正午。病院は先ほど昼食休みに入ったところで自分を訪ねに来る者はいないはずだ。訝しげに扉を振り向いたクルフェは次に聞こえてきた声に表情を一変させた。

「クー、いる？」

少し心を弾ませ、クルフェは扉へ近づくと勢いをつけないよう気を付けて扉を開く。そこにはクルフェが来訪を待ちわびていた人物が佇んでいた。

「ごめんね、連絡しないで訪ねちゃって。」

「気になさらないで下さい、シーア。ところで、どうかされましたか？」

「前に頼まれていたフォクステス感染症の資料を持ってきたんだ。はい。」

シーアと呼ばれた人物は穏やかに微笑して手に抱いていた分厚い

本をクルフェに手渡した。

「どうもすみません、お手を煩わせてしまって・・・」

「気にしないでよ。可愛い弟子の頼みを聞かない師匠なんていないよ。それに・・・クーには返せないだけの借りがあるし・・・ね。」

少し恥ずかしげに頬を染め、シーア——クルフェの師であるカティンは俯いてしまう。三年ほど前、天界の住人の支配下にあった人間界グラヴィアで暮らしていた魔族のカティンは天使だけがかかる病”天使疾患”の治療薬を作れる唯一の医師として連れ去られた。それを危険を侵してクルフェが助けに来てくれたことは今も彼女の心を暖かくすると同時に醜態を晒したことの羞恥が呼び起こし、複雑な気分になされてくれる。

「（あんな情けない姿見られちゃったしなあ・・・）」

実際は決して情けなくは無かった。むしろ似合い過ぎて目を離せないほどだったのだ。しかし、本人は決して認めないだろう。自分を女性として扱われることを最も嫌う彼女にとって『婚礼衣装を纏った自分』など醜態でしかありえないのだから。

「どうかされましたか？」

気遣うような声音にカティンは弾かれたように顔を上げた。心配そうな瞳が真っ直ぐ彼女を見つめている。

「う、ううん、何でも無い！」

慌てて首を振るカティンをなおもクルフェは心配そうに見つめていたが、深く追求することはなかった。

「そう、ですか。でしたら、あの・・・」

一旦言葉を切り、クルフェは何故か俯き言いくそうに口を開く。

「・・・もしお時間がありましたら、一服して行かれませんか？」

「いいけど・・・クーは迷惑じゃないの？」

「気になさらないで下さい。敬愛する師をもてなすのは弟子として当然のことです。それに――」

クルフェは言葉が終わらぬうちに口を閉ざした。不思議そうに自分を見上げるカティンに何でもないと微笑を向ける。

「では、こちらでお待ち下さい。湯を用意して参りますので。」

そのまま部屋を出るクルフェにカティンはそっと目元を和ませる。

「・・・有り難う。」

背後で聞こえた声に自然と笑みが零れた。その場を立ち去りながら、クルフェは先程の言葉の続きを心の内で呟いた。

――私にも、シアには返しきれない借りがあるのでですよ

自分に差し伸べられた手の暖かさを、その柔らかい微笑を、クルフェは今も覚えている。

ポットに注いだお湯を片手にクルフェは研究室の扉をノックした。しかし、何の返答も無い。首を傾げつつ、部屋の扉を開けたクルフェはぴきんと固まった。

カティンが机の上に投げ出された手紙に目を通してしている。何処か悩みがあるように顰められた眉を見、クルフェは後悔した。

「(あのようなものを置いておくべきではなかった・・・) あの・・・シアア？」

気まずそうに声を掛けると、カティンは形容しがたい表情で振り向いた。

「えっと・・・勝手に見ちゃって、ごめん。」

カティンは目を合わせようとせず、そう言って机から離れる。クルフェは無言で椅子を勧めると、お茶の用意を始めた。

「(そっか・・・クーももう二十八だもんね。こういう話が来ても、おかしくないんだ・・・。)」

初めて気付いたという様子でカティンはクルフェを見上げた。

「(大きくなったなあ・・・。)」

カティンが孤児だったクルフェを見つけ、実の子供のように育てながら自らの医学の知識を教え込んだのは今から二十年ほど前のこと。魔族として生まれた彼女は二十歳を越えたときから身体の成長

が止まっているのであの頃と何も変わらない姿を保っているが、その頃は彼女の腰の辺りまでしか背も無く、痩せて細かったクルフェも今はしっかりと均整のとれた体つきをしている。背などカティンが見上げなければならぬほどだ。

「（クーなら何処にやってもうまくやっていけるよね。）」

先程の手紙には、ヴェニスに最も古くからある病院のフォクテム院長から、クルフェを娘の婿に取りたいという申し出と、時間があれば会いに来て欲しいという旨が書かれていた。ヴェニスが実力主義の医療都市とはいえ、地位や家柄を重んじる者は多い。そのため大体の場合、跡取りのない由緒正しい医師の家柄の家に実力のある医師が婿としてとられることが多いのだ。クルフェの元に来た手紙もそのような意図があつてのことだろうと容易に想像がついた。

「熱いので、お気をつけ下さい。」

「有り難う。」

手渡されたカップを両手で持ち、少し口を含むとカティンはカップをひざの上に乗せた。

「クーは・・・さっきの話、受けるの？」

あまり聞かないほうが良いとは思いつつも、どうしても好奇心を捨てきれずカティンは遠慮がちに声を掛ける。クルフェは思わず噴き出しそうになる己を何とか押さえ込むとお茶を一息に飲んだ。

「・・・申し訳ないこととは思いますが、お断りしようと思つています。私のような者には勿体ない話です。」

「そう？僕は別に悪くないと思うけどな。」

先程とは打って変わって穏やかな表情にクルフェは驚きを隠せない。

「だって、クーは僕の弟子だもの。そんじょそこらのお医者さんよりはずっと腕も良いし、クーがいい人なのは僕が一番よく知ってるよ。相手の子にとりあえず会って見たらどうか？ 決めるのはそれからでも良いと思うよ。」

「えっと、あの・・・シアア？」

思いがけない言葉にクルフェの目が点になる。

「もし家族の無いことを気にしてるなら、僕が後見人に立ってあげるから。会っておいでよ。ちょうど招待状も来てるし。」

何も言い返せないクルフェにさらに言葉が叩き込まれる。

「もうクルフェも三十近いんだし、身を固めることも考えないと。結婚したいって前言ってたじゃない。このままだと独身になっちゃうかもだし、ね？」

ここまで言われていいえというだけの気力はクルフェには残っていなかった。

翌日の昼、クルフェはフォクテムの屋敷へと向かった。朝のうちに会いたいという旨の返事を送ったところ、昼頃に来て欲しいと折り返し連絡が届いたためだ。暑い日ざしが照る街道を歩みつつ、深いため息が漏れる。昨日カティンに言われた言葉は今も深くクルフェの心に突き刺さっていた。それも、グッサリと。

「（やはり・・・シアは私のことを少しも異性として見ては下さらないのか・・・）」

いくら院長としての仕事が忙しくともクルフェはもう『お年頃』も過ぎようとしているところ、決して異性に心を惹かれないわけではない。ただ、その相手は中々にどころかなり手ごわい。男性に興味が無いだけでなく、本人が自分が女性であるという事実を認めようとしないので。そんな自分の師匠のことをクルフェは誰よりも好いているのだが。

「（まあ、嫌われていないだけましか・・・）」

先程笑顔で見送ってくれたカティンを思い出し、クルフェは再び深くため息をついた。きっと本当に何とも思っていないのだろう。カティンにとってクルフェは弟子でしかないのだろうから。

「ここか・・・」

広い街道の中央付近に立てられた立派な屋敷の前でクルフェは足を止めた。気が重いと感じつつも呼び鈴を鳴らす。すると、中から案内の女性が現れ、クルフェを屋敷の中へと誘った。無言でその後

ろに付き従い、屋敷の中を進むと、女性はある一つの部屋で足を止めた。

「こちらがお嬢様のお部屋でございます。では・・・」

そのまま立ち去っていく女性の背中に慌ててクルフェは声を掛けた。

「ま、待ってください。フォクテム殿は」

「旦那様は先程お出かけになりました。夜中までお帰りにならないということです。クルフェ様がいらしたならばお嬢様の元へ案内するようお願いしました。」

そう言い残して立ち去っていく女性を呆然と見つめ、クルフェはその場に立ち尽くした。

「（弱ったな・・・）」

信頼してくれているようだが、いくらなんでも一人娘の部屋に異性を上がらせるだろうか。流石に好意に甘えて会わせて貰うのめ気がひけるため、クルフェはきびすを返し、屋敷を立ち去ろうとした。その時、部屋の扉が開くような音が背後から聞こえた。

「どなたか、いらっしゃいますか・・・？」

鈴の音のように澄んだ声に惹かれるように振り向き、クルフェは驚きに目を見開く。

「（シーア・・・！？）」

目の前に現れたのは薄い桃色の髪と若草色の瞳を持つ少女であった。クルフェの想い人とは瞳も髪の色も全く異なるというのに、その少女は彼女ととても良く似た面立ちをしていた。それも、普段男性に混じって本当の男性のように振舞っている姿ではなく、滅多なことでは見ることができない、柔らかく儂げな姿で少女は佇んでいる。驚きに言葉も出ないクルフェに少女はふんわりと微笑んだ。それは最も馴染みのある表情であった。

「クルフェさん・・・ですね？初めまして、私、シルディーと申します。会いに来てくださって光栄です。」

シルディーは嬉しそうにクルフェを見上げる。

「こちらこそ・・・お招きに預かり、光栄に存じます。」

動揺を抑えてクルフェは頭を下げる。それに返すように礼を返し、シルディーは微笑をたたえたままクルフェを部屋へと招いた。

「折角いらしたのですから、是非お茶を召し上がって行って下さい。今用意しますから。」

湯を取ってきますねと優雅な足取りでその場を立去って行ったシルディーをクルフェは見送り、ポツリと呟いた。

「参ったな・・・」

「あつ、カティンさん！」

背後から声を掛けられ、カティンは不思議そうに振り向いた。長く続く街道の遠くのほうから走ってくる人影が三つほど見える。その穂と影に彼女は笑顔を向けた。自分の元に走り寄ってきた一人に穏やかに声を掛ける。

「ルーイン、久しぶりだね。」

「はい！」

ルーインは嬉しそうに頷いた。遅れて後から二人がカティンたちの元へやってくる。

「こんにちは、ダーム、ウイクレス。」

「こんにちは、カティンさん。」

「お久しぶりです。」

ダームもウイクレスも一礼してカティンに笑みを向けた。彼らはクルフェの元で修行をしている見習いの医師だ。カティンにとっては孫弟子にあたる。

「今日は修行はお休み？」

「はい、院長が用事で出かけることになったので。」

「あ、そっか。お見合いに行ってるんだもんね。」

クルフェが直接指導しているため、クルフェの都合が悪いときは彼らの修行もストップだ。納得がいったようにうんうんと頷くカテ

インを対照的に納得がいけないという表情で三人は凝視した。

「い、院長お見合いなんかしてるんですか!？」

「うん。昨日クーのことを婿養子に欲しいっていう手紙が届いてたんだよ。クーは断るつもりだったみたいだけど、どうせなら会うだけ会ってきたらって。」

気にした様子も無く口にするカティンから視線を外し、三人は顔を見合わせた。

「(院長・・・お可哀想に・・・)」

「(かなりグツサリきただろうなあ・・・)」

「(カティンさんは鈍感だから・・・)」

「どうしたの？」

複雑な顔をしている三人をカティンは不思議そうに見つめた。

「いえ、院長はどんな良い条件でも、いつもそのような話は断っていらっしやいましたから・・・」

「そうなの？」

驚きにカティンは目を丸くした。考えてみれば、結婚適齢期はもうとっくに始まっているのだから、そういう話の一つや二つ、もっと前からあってもおかしくは無かった。

「はい。院長は来る度にお断りの手紙を書くのに苦労してましたよ。」

「(・・・別に会ってから考えても良いのに。)」

結婚したいと言っていたクルフェがそんな消極的な態度をとると

いうのも腑に落ちない。カティンは首をかしげた。

「（どうして断っちゃうのかな？）」

カティンにはクルフェの気持ちは永久に理解できそうになかった。カティンの疑問を察したようにルーインは言葉を返した。

「院長、好きな人がいるんですよ。ずっと片思いらしいんですけど。」
「」
「そうなの！？」

爆弾発言に先程よりも目が丸くなる。

「はい。相手が誰かまでは知らないんですが、何かかなり脈がないんだそう。それでも諦めきれないんだそうです。」

「そっか、それで・・・」

先程見送った背中が何処か辛そうだったのを思い出す。

「（謝らないと・・・！）」

いくら知らなかったとはいえ、片思いをしている相手に見合いを勧めてしまったのだ。謝らなければ自分の気がすまない。

「ごめん、僕、先に行くから！」

そう言い残してぱたぱたとその場を走り去るカティンをルーインたちは三者三様の表情で見送った。

「・・・よく、あんな嘘がすらすらと出てくるな、ルーイン。」

「別に全部が嘘じゃない。・・・少しくらい焚き付けないと、院長が可哀想だしさ。」

「うまくいってくれと良いのですが・・・」

晴れた日の昼下がりに少年達のため息が風に溶けるように消えた。

「では、クルフェさんはその方に命を救われたんですね。」
「はい。」

クルフェはシルディーと話に花を咲かせていた。普段あまり人と打ち解けないクルフェにとって、これだけ話せる相手というのはとても珍しい。

「シアに出会い、あの方のような立派な医師になりたいと思っています。医学をあの方の元で学んだのです。私にとって、シアは師として何よりも大切な方です。」

子供のように目を輝かせ、幸せそうに語り終えるクルフェをシルディーは穏やかに見つめた。

「・・・やはり、貴方は私の元にいらっしゃる方ではありませんかね。」

突然の言葉にクルフェの表情が驚きに彩られる。その様子にくすりと笑い、シルディーは言葉を続けた。

「貴方は心にもう他の方を住まわせていらっしゃいますもの。」

「シルディー嬢・・・？」

「貴方の瞳は確かに私を見ていらっしゃるけれど、心は他の方へ向けられていらっしゃいます。私は貴方の想い人に似ていますか？」

「シ、シルディー殿!？」

真っ赤になったクルフェをシルディーは面白そうに見つめた。

「似ているのでしょうか？私、こう見えても結構聡いんです。上手いくと良いですね、そのお師匠様と。」

さらに真っ赤になったクルフェを残し、シルディーは椅子から立ち上がる。

「お父様には私の方からお断りしたと伝えておきます。」

笑顔でそう言ってシルディーは自分の机の引き出しから一つの石のついた鎖を取り出し、クルフェに手渡した。

「これをお持ちになってください。」

「これは・・・？」

「恋のお守りです。意中の方に送って差し上げてください。」

トマト以上に顔を赤くしたクルフェに無理に鎖を押し付けると、追い出すようにぐいぐいと部屋から連れ出す。

「また遊びにいらしてくださいな。今度はカティンさんも一緒に。」

「は、はい。」

ギクシャクとした動作で頷くクルフェにくすりと笑い、シルディーは一礼した。

「では、また。」

パタンと扉を閉め、シルディーは人の気配が遠ざかるのを静かに待った。しばらくして、クルフェがその場を立ち去ったのを確認し、

そつと苦笑を漏らす。

「（いい方でしたが、縁がありませんでしたね。）」

器量も悪くないし、何より実直で穏やかな気性のクルフェをシル
ディーはすぐに気に入った。しかし、あれだけ一途に一人を想って
いる相手を自分の我俣に付き合わせるのは気がひけたのだ。上手く
いって欲しいと思う。あれだけ純粋な想いを長年保ち続けているの
だから。

「(振られたと・・・ということなのだろうか?)」

腕を組み、クルフェは考え込みながら街道を歩いて家路を辿った。昼間の賑わいも消え、陽が沈み行く空には薄い董色の雲がうつすらと空を彩っている。

「(まあ、もとよりお受けするつもりはないのだから良いのだが・・・)」

決して嫌いではなかった。それどころか、束の間の夢を見たようにも感じたのだ。自分が最も望む者の幻を、とても幸せな形で見たように。

手の中に封じ込めた鎖を手を開き、クルフェは穏やかに見つめた。何の変哲もない、細い銀の鎖に深い藍色の石が取り付けられているとても簡素なものだ。それを手渡してくれたシルディーの笑顔が脳裏にちらつく。自然と笑みがこぼれたクルフェの耳に遠くから自分を呼ぶ、馴染み深い声が響いた。

「クー！」

息を切らしてカティンがクルフェの隣に走りこんでくる。

「どうなさったのです？ シーア、そんなに息を切らせて・・・」

心配そうに見下ろすクルフェの横で何度か呼吸を繰り返し、息を整えると、カティンは思い切りクルフェに頭を下げた。

「ごめん、クー！クーが好きなのがいること知らなくて・・・！」

「あ、あの」

「ルーインから聞いた。他の人は好きになれないから、いつつもお見合い断ってるんだって。それなのに、行ってきたらなんて無頓着なこと言って・・・本当にごめん！」

何度も頭を下げるカティンにクルフェは慌てる。

「か、顔を上げてください！別にシーアは悪くありません。善意で言ってくださったのは分かっていますから・・・！」

「でも・・・！」

クルフェが許してもカティンは自分で自分が許せなかった。知らなかったで済ませるわけにはいかないのだ。泣きそうな顔になるカティンにクルフェは苦笑して持っていた鎖をカティンに差し出した。

「そんなに気になさるのなら、これを受け取ってください。シーアがあまり装飾品を好まないことは分かっていますが、折角いただいたものですし、シーアの方がお似合いになるでしょうから。」

不意の申し出にカティンの表情がキョトンとなる。

「これを・・・？」

「はい。身に着けてくださらなくても構いませんから。」

カティンはしばらくそれを眺めていたが、やがてずっとそれを首から下げた。夕日に照らされた彼女の黒髪と漆黒の瞳に藍色の石はとても良く合っている。

「ありがとう。大事にするね。」

普段なら決して女性らしいことをしないカティンが初めて自ら装飾品を身に着けた。それも自分の渡したものを。クルフェにとってそれは新鮮な経験だった。罪悪感があって付けてくれたのかもしれないが、それでも構わなかった。心が灯が燈ったかのように温くなる。

「さ、帰ろう。もう仕事無いんでしょ？」

「はい。シアもあちらにお帰りになられるんですか？」

「ううん、今日は泊まっていくよ。クーの好きな人の話も聞いてみたいし。」

さらりと言われた最後の一言にクルフェの表情が固まる。

「早くしないと日が暮れちゃう。さ。」

微笑と共にクルフェに手が差し伸べられる。クルフェはぎこちないながらもその手を取った。その手はかつて差し伸べられたものと同じ暖かさがあった。仲良く家路に着きながら、帰ってからのことをどうかわすか考えつつ、クルフェは再び心の中で呟いたのだった。

「（参ったな・・・）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9708r/>

望む者、望まれる者

2011年4月2日12時52分発行